

学びの改革

埼玉県教育委員会教育長 関根郁夫

はじめに

【問い】あなたは次の1～5のなかで、どれが最も重要な問題であると考えているか？

1. 自分の住む（勤務する）学校の児童・生徒の学力が低いこと
2. 「何を学ぶか」から「どう学ぶか」への授業観の転換が困難なこと
3. 様々な学力テストにより児童・生徒が過度な競争に巻き込まれていること
4. 教員の指導力が落ちてきていること、または、向上していないこと
5. 学校が一丸となって課題解決に向かう体制を築けないこと

- 子供たちや教職員に必要なのは膨大な答えではない
 - ・ たった一つの心に迫る問いが必要
 - ・ 「たった一つの心に迫る問いを持っているか？」と自問する
 - ・ 自分で出した答えであれば、膨大でも人は敢然と立ち向かう

- 「自分自身が答えばかりを求めているか？」と問う
 - ・ 答えを求める人は、自分の答えと同じ答えを聞きたいだけ
 - ・ 自分自身の問いを持たない人は何も学ぼうとしない

1 今、何が起こっているか？

1) 第3の教育改革

- 現在（第3の教育改革）…グローバル化・ポスト近代化
 - ・総合的な学習の時間 ⇒ 総合的な探求の時間
 - ・アクティブ・ラーニング（主体性・協働性・多様性、思考力・判断力・表現力）
 - ・教育の国際共通化…PISA, IB（インターナショナル・バカロレア）
 - ⇒ 世界に通用する学力保証…共通の評価基準をどこが作るか

- ICT（情報通信技術）を巡る教育産業界の動き…世界規模
 - ・リクルートの「学習アプリ」…月 980 円 ・「学研ゼミ」…月 540 円
 - ・ベネッセとソフトバンクの合弁会社「Classi」…年 3600 円（月 300 円）
 - ・Amazon が無料の教材プラットフォーム「Amazon Inspire」で教育分野に参入
 - ・知識伝達型授業は ICT コンテンツ中心、アクティブ・ラーニングが学校授業の主流になっていく…世界的動向

- 人工知能（AI）やロボットの発展…人間の仕事は何か？
 - ・アルファ碁…韓国イ・セドルに 4 勝 1 敗 ・星新一賞の 1 次審査通過
 - ・オックスフォード大学オズボーン准教授…10～20 年後、47%の仕事が AI へ
 - ・野村総合研究所…日本の労働人口の 49%が AI で代替可能

- 学習指導要領の終わりの始まり
 - ・学習指導要領は「何を学ぶか」の基準 … 「どう学ぶか」に基準はない
 - ・原理原則「ヒト・モノ・コトとの間に、意味や価値は生まれる」
 - ⇒ 教育は、ヒト・モノ・コトとの関わりから意味や価値を生む学びに移行する

2) 埼玉県の動向（小中学校に関して）

- 「考え、話し合い、学び合う学習」推進事業
 - ・確かな学力を育成するため、児童生徒が相互に学び合う学習が求められている
 - ・インプットする力を強化するためにも、アウトプットする力を鍛える

- 埼玉県版学力・学習状況調査
 - ・最終目的は、子供たち一人一人のよさを引き出し、伸ばすこと
 - ・県学調の特長は、項目反応理論（IRT）を用いたテストとパネルデータ
 - ・県学調を分析し、仮説を立てる→仮説を公開→自校のテーマを設定→自校のテーマに合う仮説を探して実践→仮説を検証→仮説を公開→…
 - ・効果のある仮説を共有することで、埼玉県全体の教育力を向上させたい

- 「今、何が起こっているか」という問いを持つか、持たないか
 - ・自分で答えを考えなければ、やるべきことは見えてこない

2 私が教育長として取り組んでいること

1) 共有・共鳴する学校文化を構築する

○ 学校間ネットワーク、教員間ネットワークを築く

- ・子供たち同士の学び合いだけでなく、教員同士・学校同士の学び合いへ
〈県立学校での取組〉
 - ・「教員の学びを支える学校内・学校間ネットワークの構築に関する調査研究」で、東京大学大学院の勝野正章教授・研究室とチームを組み、研究協力校8校と協働し、学び合いが起こり、促進される共通の要因を探っている
 - ・「直面する状況や課題に応じた学校経営の在り方に関する調査研究」で、筑波大学大学院の浜田博文教授に学校改革を実現した2校の事例考察を依頼し、学校経営の核となるものを見だし、活用することを目指した
 - ・「未来を拓く学校づくり推進事業」で、日本大学文理学部教育学科の佐藤晴雄教授の指導、助言の下、研究推進校3校が保護者や地域住民などの参画による協働型の学校づくりを進めている
 - ・学校間で「自校で評価できる取組（グッドプラクティス）」を共有する取組（学校間ピアレビュー）を始めた

○ 県学調を活用して学び合いを広める

- ・「よさを伸ばすこと」を優先順位の第1位とし、「できないことをできるようにすること」を第2位としたい
- ・自校のよさを伸ばす取組（仮説）や課題を解決する取組（仮説）を取り入れ、その成果を「効果のある仮説」として発信することで、学び合う風土を築きたい

2) 世界標準を埼玉から創造する気概を持つ

○ 埼玉の教育を世界へ発信し、共有・共鳴を図る

- ・OECD日本イノベーション教育ネットワークのボランタリークラスターに参画
⇒ テーマ：県学調を活用し、指導と学力の関係を分析、効果的な指導を普及
- ・協調学習（知識構成型ジグソー法）のコンテンツをリクルートと協働して作成し、海外（フィリピン共和国）へ配信・実践する計画
⇒ 海外の児童生徒と学び合う

3) 学校の自立を促す

○ 学校が本気になれば、教育は大きく変わる ⇒学校のファンづくり

- ・各県立学校で活性化・特色化方針として「生徒の育成方針（成長物語）」を作成
- ・「埼玉県教育環境整備基金」で寄附を集め、各学校の特色を活かした整備を行う

4) リスペクトする風土を醸成する

○ 学校や教員をリスペクトする風土を再構築しなければ、日本は衰退する

- ・まずは、自分が相手をリスペクトすることから始める
- ・リスペクトされることではなく、リスペクトできるようになることを望む

3 どうすればよいか？

1) 直面している危機は何か？

- アクティブ・ラーニングか？学力低下か？主体性や意欲のなさか？
 - ・人口減少時代の危機とは何か？
 - ・地域と学校は運命共同体である

2) 学校に何ができるか？学校は何をすべきか？

- 地域と協働して質の高い教育を提供する
 - ・島根県立隠岐島前高校は全国や世界から生徒を集めるまでに教育の質を高めた
 - ・海士町や島前高校に比べれば、モデルを研究できるだけ楽
- 菊池省三・吉崎エイジーニョ著『蘇る教室～学級崩壊立て直し請負人』より
 - ・菊池氏は学級崩壊やいじめが起きる背景を「保護者の情報不足」「子供たち同士が互いを知らないこと」と明快に指摘する
 - ・学校は何をすべきか、加須ができる教育は何か、幸せとは何か、との問いに本気で答えようとする中で、加須が元気になる方法は見つかる

3) 危機意識の共有、よさ探し、リスペクトづくり

- 危機意識を共有できる人を2人見つけ、3人で具体的に改革を進める
 - ・パレートの法則でいう「やる気のある2割」をチームにできれば、改革は進む
- どの学校やどの教員にもあるよさを再確認することから始める
 - ・可愛くば 5つ教えて 3つほめ 2つ叱って よき人となせ
- 「リスペクトするとは、どうすることか？」と問い続ける
 - ・「ほめる」ことがリスペクトにつながる
 - ・学校だよりを用いて、先生達の素敵な教育活動を児童生徒や保護者に知らせる
 - ・高いレベルの授業を教員に実践させる

4) できることから

- 「できない」とは言わない、「できる」とは言えない
 - ・自分の潜在能力を知らず、今の自分の限界で判断してしまう
 - ・今は「できる」とは言えないけれど「できることからやっていく」ことはできる

5) 最後は自分で決める

- どんな問いを立てるかも、どの答えを選ぶかも、自分で決めるしかない
 - ・できるかできないかではない、やるかやらないかである

おわりに

- あなた自身の心に迫る問いは何ですか？
- その問いに本気で答えるつもりはありますか？